榧の木のものがたり

榧に恋した前川さんは 300年後の森を夢見る

愛さずにはいられない 幻の木

榧（かや）という名前の木を、知らない人も多いかもしれない。成長が極めて遅く生育が困難なため、いまではあまりお目にかかることのできない希少な木だ。

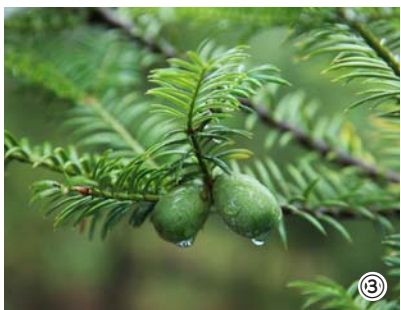
榧はイチイ科の常緑針葉高木。30センチ伸びるのに3～4年、直径1.1メートルほどの成木になるまでには300年かかるといわれる。しかし成長が遅い分、その木目はきめ細かく美しい。独特の香りと光沢があり、希少な高級木材として知られている。

この木に魅せられ、香美市の山々に榧の苗を植え育てる人がいる。前川穎司さん（高知前川種苗会長）だ。

前川さんは大の囲碁好き。日本棋院高知支部の支部長を務め、囲碁アマ6段の腕前だ。碁盤の収集にはまり、榧の原木を買い集めては碁盤作りに熱中した。やがてその情熱は、碁盤の材料である榧そのものに注がれるようになる。

榧は育つのにも時間がかかるが、木材として使うのにも長い年月を費やさなければならない。例えば碁盤として加工するには乾燥に10年は必要で、割れたり反ったりしないようさまざまな工夫をしなければならない。いろいろな面で、手間暇がかかる木なのだ。

「だからこそ、榧がかわいいと思えるがよ。世話が焼けるが、きれいで香りがいい。これ以上の木はない」

と前川さんは自信たっぷりに話し、目を輝かせる。

①榧の苗を見つめる前川穎司さん。300年先に思いをはせる　②山の耕作放棄地に榧の苗を植えていく（香北町五百蔵）　③榧の実からは、食用油がとれるほか香水にも加工できる。その香りはまるでかんきつ類　④碁盤やまな板などのほかにも、さまざまな日用品に加工される　⑤榧の木は日が当たらないと枯れてしまう。周囲の草引きなど、手間暇をかけた世話が必要

三百年先を見据えた榧の森づくり

榧にほれ込んだ前川さんが、榧の苗を作り、山に植え始めてから28年。香美市では、香北町や物部町に合わせて約30ヘクタールの山を買った。人の手が入らなくなって荒れた土地を一から整備し、これまで四国の山々に25万本以上の榧の苗を植えてきた。しかしそのうち、山に残っているのは約3割ほど。

草が伸びたら枯れる。明るく日の差す場所でなければ成長できないためだ。雑草に埋もれないよう、山に植えてからも頻繁に草を刈りに行かなければならない。

さらに、夏の暑さにも弱い。榧の成長に適した涼しい土地を求め、少しでも条件のいい場所を探してチャレンジする。

最大の難敵は、山に住まう野生動物たちだ。香ばしい果実は野ネズミのエサとなり、柔らかい苗木はウサギに食べられる。若木はイノシシやシカの大好物で、植えては食べられ、食べられては植えるという終わりのない競争のようだ。

「榧の木が成木になるまでの長い長い年数を考えれば、1年ぐらいの失敗は何ということはない」

失敗を繰り返しながらも、前川さんが植えた榧の木は少しずつ増え、着実に大きくなっている。現在では、収穫した果実から香水やオイル、さらにオガクズからは線香を作るなど、木工製品以外の商品化にもつながっている。

立派に育つまで300年。少なくとも、生きている間に榧の大木が林立する森を目にすることはできない。しかし、それでもいいと前川さんは言う。

「一生懸命育てた榧の木が、遠い未来に榧の森となる。それを夢に見るだけで、十分に幸せな人生」

前川さんは歩みを止めない。試行錯誤を繰り返しながら、1本でも多くの榧の木を植えるために。